

京都文学賞

Kyoto Literature Award

令和4年3月30日
京都市文化市民局
京都文学賞実行委員会

〔担当：文化芸術都市推進室文化芸術企画課〕
〔電話：222-3119〕

「第3回京都文学賞」受賞作の発表について

京都市では、文学の更なる振興や「文化都市・京都」の発信等に寄与するため、平成31年4月に京都文学賞実行委員会を設立、「京都文学賞」を創設しました。

第3回は、令和3年4月30日から9月13日まで作品の募集を行い、270作品（一般部門218作品、中高生部門42作品、海外部門10作品）の御応募をいただきました。

書評家等による一次選考、読者選考委員による二次選考を経て、本年2月中旬に、最終選考会を開催し、二次選考通過作品11作品（一般部門6作品、中高生部門3作品、海外部門2作品）の選考を行い、受賞作等が選定されました。

令和4年3月29日開催の実行委員会において、受賞作等を決定しましたので、下記のとおりお知らせします。

また、第4回の作品募集等につきましては、令和4年6月（予定）に発表予定です。

記

1 一般部門

(1) 最優秀賞（賞金 100万円、出版化）

受賞作 『備忘六』

作者 佐藤 薫乃（さとう ゆきの）

(2) 優秀賞（賞金 50万円）

受賞作 『十七回目の出来事』

作者 折小野 和広（おりこの かずひろ）

2 中高生部門

(1) 最優秀賞（図書カード 10万円分）

受賞作 『闇に浮かぶ浄土』

作者 高野 知宙（たかの ちひろ）

(2) 優秀賞（図書カード 5万円分）

受賞作 『彼のシナリオ』

作者 小峰 大和（こみね やまと）

3 海外部門

(1) 最優秀賞（賞金 10万円）

受賞作 該当なし

(2) 奨励作（図書カード 1万円分）

受賞には至らなかったが、外国籍の方が日本語での小説の執筆という困難なことに挑戦した御努力に敬意を表し、最終選考作品2作を奨励作とした。

ア 『忘れられた記憶』

作者 イザベラ・ディオニシオ

イ 『母は桃が好きだった』

作者 ダヨン

(参考) 最終選考委員について

- ・ いしい しんじ（作家）
- ・ 井上 荒野（作家）
- ・ 校條 剛（文芸評論家）
- ・ 大垣 守弘（(一社)京都出版文化協会代表理事）
- ・ 内田 孝（京都新聞総合研究所特別編集委員）
- ・ 山中 博昭（京都市文化芸術政策監）

※ 上記に読者選考委員の代表4名を加えた、計10名で最終選考会を実施。

<添付資料>

別紙1

受賞作等のあらすじ及び一部抜粋、作者のプロフィール・受賞コメント

別紙2

最終選考委員選評（いしい しんじ、井上 荒野、校條 剛）

一般部門受賞作2作品の出版に向け、協力出版社と調整中！！

中高生部門最優秀賞『闇に浮かぶ浄土』は
協力出版社の祥伝社から刊行予定！！

《一般部門 最優秀賞》 『備忘六』

あらすじ

「社会は昼に進み、世界は夜に膨らむ」。トラウマを抱え、ままならない現実で傷ついた小日向は、空想世界に逃げ込む。そこで彼女は、六本足の怪物・グーデモスライダーに連れられ、唯一の記憶「白いかえる」を探し「永遠に夜の京都」を彷徨うのだった。生きづらさを抱える全ての人に贈る、切実な恋と仄かな希望を描いた現代のお伽話。

作品の一部抜粋

1 プロローグ

二条城の上空を、鶴つるが飛んでいる。

夜の深い暗闇の中で、まるで天使のような純白の羽根を大きく広げて、鶴はしなやかに強く羽ばたく。町をすみずみまで眺めるように、ゆるやかにまわりながら、のびやかな飛行を続ける。

鶴は、遠い過去をぼんやり追憶していた。それはたとえば、自分が少女だった頃のこと。しかし、もうほとんど何も覚えていない。残っているのは、夜のイメージ。どこまでも深く優しい世界の、胸がときめくような静けさ。

眼下に広がる町の片隅で、白いかえるが一匹、跳ねている。鶴の視線は、そのかえるにじっと注がれる。しばらく目で追いかけて、鶴はない。透明な水流のようにはてしなく澄んだその声を、限りなく正直に、純粹無垢のまま、夜の町に何度も響かせる。

鶴の中で、とりとめのない抽象がいくつも浮かんで消え、浮かんで消えた。輪郭を持たない薄ぼけたファンタジーが、細く長い吐息になって体外へ流れ、やがてすべからず闇に溶けていく。どこか懐かしい体感。しかし、鶴はもう、何も思い出さない。

遙か遠くの地面から、鋭い弓矢が放たれた。その矢は、あまりに正確に、まるで標的に吸い寄せられているかのよう、鶴をめがけて飛んでくる。

やがて、弓矢は鶴の喉に突き刺さった。そのとき、ようやく呼吸が止まる。悲しみと安堵の入り交じった最後の声。鶴はそのまま、ふらふらとしばらく夜空をさまよって、やがて、力尽きて墜落する。落ちていく。静かに落ちていく。

ぱしゃん、と涼やかな音を立て、鶴の身体は、二条城の堀に着水する。そして、そのまま水中へと沈む。どこまでも、どこまでも深く沈んでいく。

朦朧とする意識の中で、鶴はまどろみ、夢を見ていた。昼間の反対側にある、さかさまになった京都の夢。その優しい町では、いつまでも永遠に夜が続く。そこへ行けばきつと、鶴は、ようやく安らぎを得られる。

鶴は沈んでいく。どこまでも、どこまでも深いところまで。その薄いまぶたの裏側に、いつか泣きながら思い描いた、遙か遠くの理想郷を見ている。

2 二条城

眠れない夜は、二条城のまわりを周回します。

グーデモスライダーは、散歩を愛する怪物です。特にこの京都という町は、たとえば愛らしい花だけを摘んできて、潇洒なブルーケを作るのと同じ要領で、魅力的な小道ばかりを集めて、それらを縦横に並べることによって構築された町でありますから、散歩を

するには最適です。素敵な道がたくさんあって、好ましい角もたくさんあります。足がたくさんある生き物も、大満足の歩き甲斐。グーデモスライダーの胴体からは、六本の足が生えているので、それらをまんべんなく動かして、夜のウォーキングを楽しみます。

グーデモスライダーは、夜風の香りがとても好きです。社会は昼に進み、世界は夜に膨らむ。それでは、どちらかといえば、京都は社会か、それとも世界か？ 真夜中に巨大なお城のまわりをぐるぐる歩きながら、ときどきぼんやり考えてみるのです。

もちろん、グーデモスライダーはたいへん長生きの怪物ですから、理論上の答えはきちんと知っています。世の中は、社会と世界の両輪が等しく回転することで順調に前進するのです。それでも強いて選ぶなら、京都は社会か、それとも世界か。グーデモスライダーの生まれ故郷であるこの町は、そのどちらの色もたいへんに濃いため、究極の二択について思いを巡らせずにはいられないのです。

作者プロフィール

佐藤 薫乃（さとう ゆきの）

一九九八年、岩手県生まれ。岩手県在住。

立命館大学文学部卒業。

二〇一六年、岩手県立盛岡第三高等学校在学中に、「うるわしの里」で「第三十一回全国高等学校文芸コンクール」小説部門最優秀賞・文部科学大臣賞受賞。



受賞のコメント

小説を学ぶため、大学進学をきっかけに京都で暮らし始めました。がむしゃらに夢を追いかけた学生生活は思いのほか短く、すぐに過ぎてしまいました。京都の時空はどこか独特で、ほんの一瞬の思い出さぬも、永遠に残る気がします。長い歴史をうけとめてきた基盤の目状の町そのものが、寡黙で美しいうつわとなつて、記憶を大切に託っておいてくれるようで、この土地で得たものは、きつとずっと失われないうと信じていることができます。

小説の道はあまりにもけわしく、いつも悔しいことばかりですが、京都での学びを糧に、また精進していこうと思います。京都文学賞に関わってくださった皆さま、そして、京都で出会ったすべての皆さま、本当にありがとうございます。

あらすじ

一九八四年十一月十七日十三時十七分、古来「カヤ」と呼ばれた京都府乙訓郡大山崎町で、原因不明の大規模な揺れが発生する。精神科の若き医師・尾上浩一は、生き別れとなっていた双子の弟を捜索するため、第十七次調査隊に加わるが――「時間のループ」「メンター」「門」など、独創的な世界観で人々の記憶と再生を描くSFストーリー。

作品の二部抜粋

年が明けた、一九八五年の一月十二日の午前九時、最も大規模な作戦行動が二つ、開始された。第四、五次遠征調査計画である。この第四次と五次の一ヶ月に及ぶ調査で、地域との境界が判明し、その境界をワイヤー柵で全て囲んだ。そこから半径一キロメートルは強制的に非干渉地域となり、政府主導による特別臨時法が制定され、それを根拠に米軍と自衛隊の混合部隊が外側に展開していた。そして火器を持った数百人の部隊が街への同時侵入を試みた。総数で五百人規模である。結果的に武力をもちいるという方針が最後となる結果となった。その全員が戻って来ず、司令部全体がバニクに陥った。内部からの連絡が全くなく、打てる手は何もなかった。そこからはもう学者や研究者たちの出番になった。彼らの研究も遅々として進まず、半年以上が経過し、境界が拡大も縮小もしないことで一定の安心感が得られていたものの、親類や家族は悲しみのどん底を過ごしていた。派遣回数が二桁になる頃には、侵入する部隊の規模は少数になった。解決の糸口すら見いだせず、世論を気にしてか政府発表においても扱いが小さくなり、日本列島における交通手段の回復を進める再構築の方向に、より力がとられるようになった。何と言っても、日本の交通網の要である鉄道と道路といった動脈がいったん大山崎町で東西に断ち切られたのであるから、早急な対応が必要だったのだ。直接土地に関係のない大規模な災厄と同じように関連をもたない人から少しずつ出来事のインパクトが消えていき、あと数年は続くバブル景気に気持ちを移していった。のちに「西日本断層現象」として呼ばれることになるこの揺れは、専門家がいまだにこの現象に熱狂しているが、一般的には月飛行であるアポロ計画のように、場所そのものの探索は犠牲者の家族や知人を除いて興味を示さなくなっていた。外側半径三キロ圏内はまだまだ回避地域として人がいなかった。散発的にはじまる調査出発のセレモニー、ロケットの打ち上げの式典のようなものを除けば、もう誰も大した成果を期待しなくなっていた。調査派遣が十二回を越えた頃には親族たちですら諦めムードが漂っていた。誰かがあの場所は「月よりも遠い場所」と言うようになった。月であればまだ帰還したのもいるのだから。

そして、私のような人間は、そんな光景にも、地域にも関係がなくいつもと同じままだった。起きている間は、仕事に全力を出すことを求められて、あとの残りは寝るだけだった。その事に疑問をもったことはなかったし、それがある意味幸福だったと思えたこともある。自分が信じていることに、何も考えずに寄り添っていられたということが。

その後、残された証言や発見した映像を精査した結果、さまざまな計画が立てられては破棄されたが、主なポイントは侵入と脱出の方法を確立することにあるようだった。そしてあの週刊誌の記事とカメラの存在から、ある推測が導きだされた。それがこの春先のことだ。このカメラの発見は二つの事を意味していた。

作者プロフィール

折小野 和広（おりこの かずひろ）

一九七五年、大阪府生まれ。大阪府在住。

関西学院大学卒業。

IT関連の会社員、自営業のかたわら、自主映画製作や小説執筆活動を行っている。

大山崎町のミニコミ誌「大山崎ツム・グ・ハグ」にて、エッセイ「このへんの人々」を連載中。



受賞のコメント

この小説のアイデアは、映画の撮影で主要人物をエキストラとして別のシーンに出演させてしまう「うっかりミス」に起因します。ミスでありながら「これは何かある」と感じ、小説として書き始めたら大きく展開していきました。完成したらすぐ公開するつもりでしたが、偶然、知人に京都文学賞の存在を教えてもらい、京都という地名に惹かれて応募することにしました。

だから、受賞の知らせを聞いて、まるでわらしべ長者みたいだなと思っています。うっかりと偶然と選考いただいた皆様がこの場に導いてくれました。ずっと開かなかった門が少しだけ開いたような、そんな気持ちでもいます。

この度は優秀賞に選定いただきありがとうございます。今後もより良い作品を書けるよう、日々物語と向き合いたいと思います。ありがとうございます。

あらすじ

幕末の争乱と東京^{てんと}京都で生気を失っていた明治初めの京都。そんな中、博覧会の開催で久しぶりにまちは賑わいを見せていた。天然痘を患い失明の宿命を背負った少女・ちとせは、まちで聞こえた三味線の音に心を奪われる――移りゆく都を舞台に、様々な出会いを経験しながら三味線とともに成長する少女の心の機微を繊細に綴った青春小説。

作品の一部抜粋

桜はちらほらと咲き始めたばかりで、風はまだ肌寒い。少しの外出と違って何も羽織って来なかったから、川の上を吹いてきた風の冷たさに彼は思わず懐手をした。

遠くから何か楽器の音がした。琴かと思っただけ、耳を澄ましてみれば三味線のような音だ。もう祇園の方まで歩いて来てしまったのだろうかと思ふと藤之助は来た道を振り返ったが、三条大橋はまだ大きい。

少し歩いていくと、三味の音は大きくなった。目を凝らせば草むらの向こうに人影がある。

藤之助は草むらの手前で立ち止まった。何故だか、これ以上近づくとが無粋に感じられたのだ。その少女は何か特別なものを持っているわけではなかった。雰囲気も田舎の娘と言ったところだし、三味線もまだ習いたてのようで、音がたどたどしい。それでも聴いていたいと思わせるのは、彼女の一言一音を大事に重ねて曲を続けるその懸命さだった。手元を見るのに集中して丸くなった背中もまた何だか人間臭く、三味線といえど芸妓の洒落なものしか想像できない彼に新鮮な感じを与えた。

寒さを感じることも、町の祭りのような活気も忘れて、藤之助はただ懐手のまま、草陰の向こうの少女を見つめた。

その時ひととき強い風が吹き、二人の間の草がなびいた。少女は川の湿気を含む風から三味線を庇うようにして抱いた。その袖に桜の花びらが一枚、音もなく舞い降りた。彼女はそれを指でつまんで空にかざす。もう一度風が吹いた。草が割れて、河原に正座する少女の姿がはつきりと見えた。そしてその膝元にお椀が置いてあるのを見て、藤之助は小首を傾げた。この少女は一体何者なのだろう。舞妓でもなく、また目も見えていようだから警女^{けいじょ}でもなからう。それなのに恵みを受けるためのお椀を置くのだなんて。今の風で花びらは彼女の指を離れ、どこかへ飛んで行ってしまった。名残惜しそうにその消えた方を眺めてから、少女はゆっくりこちらを振り返った。

彼女は何も言わずに、藤之助のことをじっと見つめた。街の人にはないその純朴な瞳に、彼は何と言つていいか分からなくなつてしまった。

「あの、いつもここで弾いてらっしゃるの？」

ようやく口を開いた藤之助の問いに、彼女は首を横に振った。

「今日が初めてです。まだ下手から人に聴かれたくないと思つとつたけど、あんまりこの川がきれいだから出てきてしまいました」

藤之助はほっとしたような嬉しいような顔をして、「この川が好きですか」と訊いた。

「はい、故郷でもないのに何だか懐かしくて」

少女は視線を藤之助から川へ移してそう呟いた。

「特に風がええですね」

藤之助はそう思いますか、と我が意を得たように言った。

「この桜は散るんやない。川の上を滑る風で吹きあがるんです。俺もあややつて飛んでみたいなあと思う。高く高く飛んでいたら、どんなに幸せやろ、って」

作者プロフィール

高野 知宙（たかの ちひろ）

神奈川県在住。

渋谷教育学園渋谷高等学校二年。

二〇二〇年、「十六畳の宝箱」で「第一回京都文学賞」中高生部門優秀賞受賞。

「第十回井上靖記念館青少年エッセーコンクール」高校生の部優秀賞、「第八回高校生直木賞」の本選考会に参加。



受賞のコメント

京都で三味線を弾いている女の子は、気が付いたら私の心に住み呼吸をしていたというくらいに自然に生まれた存在でした。その子に「ちとせ」という名前を付けて、どんな人と出会い、どんな曲を弾き、どんな毎日を過ごしたのかを考えているうちに、明治初期の京都に生きる人々が彼女に声を掛けるようになりました。そしてちとせが笑ったり泣いたりしながら歩き始めたことで、物語として立ち上がったという感じです。自分で作った話という感覚はあまりないので、それでこんな賞を頂いたというのも改めて考えると不思議な気がしますが、私が友達のように大事に思っている人たちの物語をこうして認めていただけで、本当に嬉しく思います。ありがとうございます。

あらすじ

箱屋を営む父のおつかいで、人形作家の「先生」のもとを訪ねた少年。そこで初めて御所人形向き合った彼は、作り手と人形の不思議なつながりを感じ取り、「偶然と必然」に思いを馳せる――受け継がれた伝統を未来へつなぐ思いを素直に込めた、ある少年の成長物語。

作品の一部抜粋

「どう思う、この人形」

どうもこうも人形のことなんて良く分からないし、技術的なことなんてなおさらだ。

「いや、僕にはよく分かりません」

てきとうな事を言ったところで見ずかされそうで、正直に言った。

「君がどう感じたか、見た時どう思ったか。君の印象が知りたいんやけどな」

正直に何か言わなければならぬ雰囲気になっている。

「僕なんか感じたことすし、おこらんといて下さいね」

「かまへんから言うてみ」

「正直、気持ち悪いって第一印象でした。人であって人でないような。でもですねー」

「ほうなんや」

「でも何かみてるよとホッとするような、がんばって応援してもらえてるような、なんかあたたかい感じですかね。上手く表現できませんけど、今見るとそんな気がします」

少し何か違和感のような物も感じたが、それは黙っておいた。

「この若者がこう言うてくれたので、よかったなあ」

先生が奥の部屋に向かって言った。

「ありがとうございます」

奥のおばさんは泣いているのか、言葉をつまらせ気味に話した。

「二階にあがって先に仕度しといてくれるか」

「わかりました」

そのおばさんは軽くこちらに会釈して二階へ上っていった。

「先生、僕、なんかまずい事言うてしまいました？」

「いやいや、さっきの君の言葉は嬉しかったと思うよ。実は、この人形、あの人が作ったんや、初めて」

あのおばさんは先生のお弟子さんだったのだ。

「初めてですか？ それにしては上手にできているんじゃないですか？」

「初めて言うても何日も何日もかかって苦労してやっとここまでたどりついたんや。まだまだ直す所はぎょうさんあるけどな。まあひと段落ってとこで君の意見を聞いてみようかと思っただんや」

「それやったら余計に僕なんか意見言うたらあかんのちがいます？」

「どんな人であれ、どう感じたかを聞きたかったから、その辺はいいんや。君が応援してもらえるように感じたならそれでいいんや」

「うーん」

あの違和感を言うべきか言わずにおくべきか、また、言うとしてもどう説明するべきか、考えこんでいた。

「何か気になるか？」

「いや、何て言ったらいいのか、この人形見ると、何か違和感というか……がんばれ

って言われているのは確かなんですけど、何というか、そう、このお人形さん自体は、しんどそうなんです。そんな感じが少しするんです」

「そうか」

「僕みたいなのが何をえらそうにつて感じですよ、すいません」

「違う違う。君がそう感じたのもしかたない事かもしれない」

どういう事か聞いてみると、人形を作っていると、その最中の作者の気持ちが人形に出ちゃって、見ている人にそれが伝わってしまうという事だった。あのお弟子さんは、苦労して、苦労してしんどい思いをして、ここまでたどりついた。その気持ちが人形に移って、その人形を見た自分に伝わってしまったんだと。

作者プロフィール

小峰 大和（こみね やまと）

京都市在住。

京都産業大学附属高等学校一年。



受賞のコメント

この度は、このような評価をして頂き大変光栄で、まさか僕の作品が、という驚きと共に有難く思っています。そもそもは、夏休みの課題の内のいくつかの選択肢の一つであって、原稿用紙三十枚以上の物語を書いてみる事に挑戦しようと思き始めたものでした。

物作りをする人は、その想いを物に込め、それが魅力の一つとなつて、次に手にする人を動かす生かす。人の想いにはそんな不思議な力があると思いつながらこの作品を書きました。

僕にとつてこの受賞は、これからの自分の上げみとなります。この作品を読んで頂いた皆様、選考して頂いた皆様、本当に有難うございます。

《海外部門 奨励作》 『忘れられた記憶』

あらすじ

大学の研究室に所属する二十八歳の「私」は、数年ぶりに訪れた京都で、自分自身とそっくりな女性を見かける。彼女の後ろ姿を追いかけて辿り着いた先で、彼女が目にしたものとは――現実と『源氏物語』の世界が混じり合う、不思議な京都の体験譚。

作品の一部抜粋

思い出の仕組みは本当に不思議なものだ。

聞き覚えのある音、鼻につんと来る匂い、かつて目にとまった色合いや形、さまざまな要素が引き金となって、何も考えずにぼーっとしているときに、意識のかたに追いやられていた遠い記憶のかけらが勢いを取り戻して、唐突によみがえる。

旅行先のビーチを走っていて、ソフトクリームを落とすことになった。まだ幼い子供だった私は、零れ落ちそうな悔しい涙を、目じりに力をこめて必死に堪えたが、瞼の内側がヒリヒリと痛くなった。黄味がかったバナナアイスと茶色い砂が混ざり合い、アイスが溶ければ溶けるほど、奇妙な模様が描き出され、それが絶えず変化し続けていた。足を伸ばして、柔らかくなりつつあった塊を爪先で突っついてみて伝わった、ひんやりと冷たい感覚ですら、今でも正確に思い起こすことができる。

十三歳の夏、知り合いがよく着ていたワンピース。その小ぶりの花柄がかわいくて、彼女がてくてくと歩くと裾がふわりと翻り、絵のごとく美しかった。彼女を真似したくて、母にせがんで近所のデパートに連れて行ってもらい、似たようなものを探し回ったけれど、何を着てもぼっとしない感じがして、その日は結局何も買ってもらわなかったのだ。試着室の細長い鏡に映し出された自らの姿を一瞥して深いため息を吐き、友人のきれいな格好を羨ましく思った。そのときに自分の顔に浮かんだ表情を思い返すと、胸が少しチクリとする。

作者プロフィール

イザベラ・ディオニシオ

一九八〇年、イタリア生まれ。東京都在住。

お茶の水女子大学大学院修士課程修了。

現在、イタリア語・英語翻訳家及び翻訳プロジェクトマネージャー。

著書に『平安女子は、みんな必死で恋してた イタリヤ人がハマった日本の古典』（淡交社、二〇二〇年）。



作者のコメント

初めて日本を訪れたときの滞在先は京都でした。

一ヶ月ほど鴨川沿いのユースホステルに泊まり、未知の世界に飛び込む勢いで、毎日の散策に出かけていました。思いがけない出会いがあったり、意外な発見があったり、そのとき京都で過ごした日々はワクワク感に満ちていて、十年以上が経ってしまった今でも、立ち寄るたびにその感覚が思い出されます。拙作はそのような個人的な体験と王朝文学の世界への憧れから生まれたものです。

力及ばず、しっかりとした構造を持った物語を紡ぐことができませんでしたが、今回の奨励を心の糧とし、今後も書き続けたいです。京都文学賞に携わる方々に感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。

《海外部門 奨励作》 『母は桃が好きだった』

あらすじ

韓国人の母と日本人の父を持つ双子の姉弟・宮村はなとりんは、母・ユリの突然の失踪に直面する。手がかりを得るべく、残された母の日記を紐解くが、そこには、京都で生きる若き一人の女性がいた――知らなかった母の姿に気付き、受け入れていくまでを懸命に描いた物語。

作品の一部抜粋

桃の芯が一番おいしくあってほしい。母が好きなので。私が彼女のためにできる最善のことは、彼女が選んだことが全部最高のことであるように祈ることである。愛は止められないから。いつも家族と一緒に桃を食べる時に彼女は芯の部分だけを食べる。それが一番おいしい部分だといいながら、彼女は毎回そうする。私と私の弟が食べることを。をただ見ながら「大人になったらわかるよ。これが一番おいしいところである。それはやっとながら。彼女は母を卒業したいとずっと思っていたということ。それは、私たちが嫌いになったからではなく、飽きちゃったからでもなく、ただ自分と向き合いたかっただけだということ。私たちは二十四歳になった日に気づいた。

作者プロフィール

ダヨン

一九九七年、韓国生まれ。京都市在住。

二〇二〇年に来日。現在、同志社大学在学中。同志

社大学スピードスケート部に選手として所属。

YouTubeチャンネル「young da in the kyoto」運営中。



作者のコメント

この度は第三回京都文学賞の海外部門奨励作に選んでいただき、誠にありがとうございます。自分はできないと思って諦めていた夢に近づいてほしいというメッセージをもらった感じがしました。京都で外国人女性でいるからこそ書けた作品でした。誰もが持っている経験・感情をより伝わりやすく、いろいろなとたくさん悩んで書いた作品でした。「私のように平凡な人も一つの物語を誕生させる人になれる」という経験をさせてくださって誠にありがとうございます。このような素敵な機会を設けてくださった、京都文学賞の方々に感謝の気持ちを申し上げます。より多くの母親に、そしていつか母親になる方々にこの作品が届くように。

《選評》 いしい しんじ (作家)

バリエーション豊かな候補作が並んだ。続々と初舞台に登場する、晴れやかな作品に触れるのが、ひたすら楽しかった。

『桜酔い』。このボリュームを破綻せず書ききった筆の勢いに、まずは敬服する。素直な文章もストレスを感じず最後まで読めた。

が、そのぶん登場人物の類型化が目立ち、小説の世界をきている人間のように感じられなかった。料理屋の女性と大学教授が心中した意味が最後までわからない。少年が女性と山をめざした理由も。それならいっそ、男たちをつぎつぎと無差別に雪山へ誘い込む、謎の小料理屋の女の短編、としてみたほうがよかったのではないか。

『鬼と雨』。人間のいやらしさ、肉体の無気味さ、生きることによるべなさから、寸分も目をそらさず、書ききろうという意思はすごい。会話のリズム、室内にこもる暮らしの描写など、ごく自然で、流れるように読み手のうちへ入ってくる。ただ、エピソードが濃厚ないっぽう、出てくる人物たちの印象は意外なくらい薄い。「しず姉さま」ですら、輪郭があいまいで、どのようなところの持ち主かまいちわからない。著者は、人間の無気味さを描きながら、その無気味さをみずから引きうけることなく、小説から距離をとって、安全圏で書いている印象をうけた。だから全体が茫洋としている。遠い時代でなく、身近な、たとえば自身の暮らしなどを題材にとってみれば、この著者の精緻な筆致はより生きるように思う。

『天楽の鬼』。鬼がすばらしい。鬼のくせ、いや、鬼だからか、もっとも人間くさい。ただ鬼として、そこにただで、鬼っぽいことはなにもしていないのだが、その本質的なだらしなさがなんとも鬼だ。この、すばらしい鬼の描きかたが最後までぶれなかった。そこはここから、賛嘆の念を送りたい。いっぽう、主眼のはずの音楽の描きかたに、最後まで不満が残った。冒頭のふたりの笛の音は、まだ丁寧に描かれているが、次第に、小説のなかで奏でられている「音」が、こちらに響かなくなってくる。「○○のような」といったたとえや背景の説明ばかりで、音響を含んだ空気感がない。後半の蟬丸の琵琶も、博雅の「長慶子」も、たいして代わり映えしないように感じてしまう。これでは著者の狙う、音楽に狂うひとびとの、時代をこえた群像劇はなりたたない。著者は格調の高さより、人間くささ、だらしなさ、下世話さを、小説に求めてはどうだろう。この鬼が書けるひとは、その内に、相当深い「ユーモア＝ヒューマニティ」を湛えているように思うから。

『教えて、シュレーディンガー』。読んでいて楽しかった。全候補作中もっとも感情移入した人物はまちがいなくまどかだ。ページの余白に何度も、がんばれまどか、と書きつけた。まどかはたしかに情けない。その情けなさを、著者は受けとめ、自分のこととして引きうける。かわりばえのしない研究室、結果のでない実験、院生の焦り、それらを丹念に、過不足なく、真摯に描いてゆく。それで後半の、ささやかな成功の描写が生きてくる。理系の研究にまつわる話で、こんなにもリアルな研究者目線で、かつわかりやすく、実験



の苦しみ、喜びを味わわせてくれた小説は、他にあまり読んだおぼえがない。それだけで、ぼくは、この小説は半ば大成功、と思う。

残念なのは、シュレーディンガーがまったく生かされていないことだ。天才、かもしれない。ファンタジー、かもしれない。けれども、だからといって、読者にもまどかにも、ただの「謎のじいさん」でありつづけるだけでは、小説の柱としては脆弱にすぎる。思索をいっそう深め、もし彼が、「実際に」、現代の大学や京都の風景を見たら、どう感じるか、どんな行動をとり、現代にどんなインパクトを与えてくれるか。まどかに、それをこそ「教えて」あげたかった。

『備忘六』。静謐な文章。すべての語が、それがあべき箇所へ、あべき順に、ゆるぎなく配置されている。といって理詰めではなく、まるで真上から巻いた葉が、机の上にそのように配列されたかのように、ごく自然にことばがつながっていく。よほど、ことばを愛でるひとだ、と感じた。すばらしい「ファンタジー世界」の描写を読んでいる、そのあいだは。

「現実世界」にはいると、ことばの並びかたが一変する。静謐でなく喧噪。配列というより放埒。ひとりの少女が、暮らしの行き詰まり、報われない思い、孤独を嘆く。この「現実」の主人公、小日向の人物造形が、この著者にしては甘いように映った。「私の頭は猿で、達也よりずっとバカ」で「もっとメルヘンでロマンチックな、たとえばシンデレラ城とかユニコーンとか、お花畑とかふわふわのドレスとか。そういうヨーロッパ的な乙女趣味のものの方が好き」なのなら、「ファンタジー世界」の風景は、なぜカラフルで、ふわふわで、ヨーロッパ的ではないのだろうか。あんなにも静かで、こころやさしい妖怪ばかりが住む京都なのだろうか。

現実の京都から逃れられない、ということなのか。それほど、祇園の客や達也という小日向の描写は強烈だ。思いが先立ち、ことばが制御されず、奔流のように出てくる。小説ならここは、アンバランスに見え、けれどもその裏で著者は（無意識にでも）バランスを制御しなければならない。みごとに「バランスを欠いた独白」のように、小説として、書いてみせなければならないのだが、祇園の店での島田とひめかの会話あたりは、小説として成りたつ以前の、実際の会話を書き取った散文のように流れてしまっている。「人生に欠けているもの」をひとつずつあげていく場面も、読むのがただつらく、小日向のことばの向こうに、小説の脈動を感じられない。このような場面を「ぼやき」に墮とさず、ひとり歩く彼女に、読者の心情を寄り添わせる磁力が、著者のことばには、あきらかに備わっているはずなのに。

オリジナルな小説世界を、丹精なことばで描きだす、唯一無二の作品。「ファンタジー世界」の繊細な目で、「現実世界」をも見つめ、書きすぎないことを徹底し、木の葉のようにことばを配置していれば、さらに上のレベルの小説がうまれていた。すばらしい書き手であることはじゅうじゅう認めつつ、ぼくには、この作品は、著者のレベルをさらに引きあげる、渾身の傑作とは思えなかった。もっとすごいものがうみだせる書き手だ。勇気をもって次作に臨み、さらに自身の世界を、小説の風景を、広げていってもらいたい。ここ

ろから期待している。

『十七回目の出来事』。ぼくは今回は、この作品を第一に推した。著者は今作で、一生に何度かしかない冒険をしたと思う。まさしく主人公の浩一と同じように。そのことをまずは讃えたい。京都文学賞は文学の賞だ。そして、書き手の存在を賭けた冒険からしか、すぐれた文学は生まれ得ないのだ（『羅城門に啼く』や『鴨川ランナー』がそうだったように）。

大山崎が舞台。その勘どころもまたすばらしい。あのだだっ広い空、箱庭のように点在する山、川。どこからもつながり、どこへもつながっていけそうな空間。駅前からつづく畑地、道路の描写など、著者がこの土地を熟知していることは明かだ。だからこそ、書きすぎない。必要なことだけを、最小限のことばで切り取り、読者の前にそっと並べる。自己表現はない。風景に、人物に、物語自身に語らせる。

導入部分をもたもたしている、と指摘があった。たしかにそのきらいはある。時制がふらふらと安定しない。また、「なぜなら～だからだ」の多様によって、文章にブレーキがかかってしまう。作中の「から」をすべて取っばらっせば、途端、目が覚めるように読みやすくなるはずだ。

時間の形が手だと、ふたごの弟が言った記憶、洋館の描写。手品の種。すべてが淡々と記述される。それだけで説得力をもって、一瞬ごと、それぞれの情景がちあがる。目に見える表面だけを描いていながら、その向こうにあるこころの揺れ、未来の光まで垣間見えた感覚をおぼえる。

調査隊のメンバーが紹介され、準備期間のなかで、ことばはどんどん切り詰められてゆく。小説が生きている、と、このあたりで感じる。そうして、謎の区域「カヤ」への侵入がはじまる。直径6メートルほどの通路「へその緒」を伝って。

このあたりからの緊迫感、しずけさ、ほんとうにすばらしい。まるで読者自身、調査隊に加わって、一步一步「カヤ」に踏みこんでいくような、リアルなスリルとサスペンス。一級のエンターテインメントを味わう悦びに、息をつめて文字を追いながら深々とひたされる。浩一が「初めて、怖いと感じた」前後の描きかたは、リズム、ことば、広さ、短さ、すべて申し分ないどころか、この著者にして初めてこの世に描き出すことのできた小説世界にちがいない。そして、なによりも大切な「わからなさ」。

主人公浩一は、冒険のさなか、何度も何度も「わからない」。しかし時間は進み、「わからなさ」のその先へ、浩一は歩みこんでゆき、さまざまなひとと出会う。同じように、著者もこの小説で次々と、あらたな「わからなさ」と出会う。それらを蔑ろにしない。ていねいに触り、まわりを歩き、平易なことばで書き写し、そうして深くつぶやく。「わからない」と。その声は、文字では書かれないが、読み手にも、木霊のように伝わる。

著者は立ち止まらない。逃げないし、スルーしない。「わからなさ」を「わからなさ」のまま大切に扱い、みずからの「わからない」を次々に広げてゆく。結果、浩一は水路を経て生きかえり、著者も見事に、豊かな果実を携えてこの世へと戻ってきた。

文学賞の最優秀作品として、この小説がふさわしいと、ぼくはいまも思っている。優

秀賞にとどまったものの、近いうち、おおぜいの目に触れ、小説を読む悦びを読者の胸にあらためて沸きたたせてくれることを、こころから待ち望んでいる。

『二乗の翡翠』。語り手の高校生・翡翠は、一見やんちゃな見た目なのにじつはこころやさしく、日本語でいやな目にあつたため独学のフランス語で話す。そのあたりの人物の設定が、いい意味「へん」で、好ましく読んだが、天才的な頭脳を示すのが語学など外面的なことにかぎられ、言動がありきたりで凡庸に感じた。独白でなく、翡翠を突き放して、引いた目線で書いたら、「へん」な言動がおもしろく読み手に伝わったかもしれない。フランス人ノエは、ひょっとして幽霊か、翡翠の見ているまぼろしなのかも、と最後まで邪推してしまうほど、その内面がわからなかった。ノエのことばや物腰が、翡翠を動かすほど美しいなら（そして彼が生きた人間であるなら）、外見や声に、その内面があふれているはずだ。「求める相手には惜しみなく与える」、愛にあふれた人物を描きたかったのかもしれないが、善意だけを訴えるひとがうさんくさいように、この小説のノエも心根が見えず、謎の人物のまま終わってしまった。ただ、最後まで楽しんで書けるのは、書き手として大切な才能だ。

『彼のシナリオ』。選考会での評価は高かった。ぼくも最後まで好感をもって読んだ。通りの外から先生宅にはいったときの、京町家のうす暗さ、土間の埃、畳の匂いを、文章から感じたりもした。著者はみずからの知った経験を、的確に、シンプルなことばで、十代の呼吸でことばに表してゆく。そのみずみずしさ、いさぎよさ。「先生」ももちろんよいが、ひょうひょうとした「父親」の立ち方がとても好ましかった。会話から伺えるふたりの関係は、京都の父と息子そのもので、こういう文章を読めるのは、本文学賞あってこそこのことだ。ただ、最後まで読んだとき、小説を読みきった、という感慨が薄いのは、掌編に近いその短さのせいばかりではない。主人公のまわりでなにが起き、そして、それはじつはこの人形が、というエピソードが明かされる。そのくりかえしばかりでは、読者は先回りして「きっとこれも人形が」と感じてしまう。そしてその予想が裏書きされるのでは、「読む喜び」はなかなか湧いてこない。「いい青春小説になる可能性大」と、ぼくは余白に書き記した。そのためには、なにがしか、主人公に、読者の想像をこえた変化が必要だ。

『闇に浮かぶ浄土』。ページから音がきこえる。衣ずれ、吐息、瞬きまで、そっと耳に届く気がする。ましてや三味線の演奏場面は、目の前に三味線が浮かんで、楽器みずから弦を弾き鳴らしている錯覚をおぼえるほどだ。ちとせ、藤之助の成長と変化。お菊、車屋の旦那の諦念。著者は全身全霊を登場人物たちに寄せて、ききとり、少しずつ書きつづる。会話文と地の文がつながり、溶けあい、小説の脈動をもって読み手のなかに流れこむ。小説を読むのが好き、小説を書くのが、なによりも好きなひとの小説。そんな作品が小説好きの胸を打たないわけがあるだろうか。

舞台として、明治初期、どこか宙ぶらりんでどこへいくかみな不安だった頃の京都を、物語としてこのように、歴史のなかからすくいあげた眼力も見事。ちとせの目はだんだん見えなくなっていく。逆に、都には新しい光がつぎつぎと灯りだす。じつは、逆ではないのか。ちとせの内は、まあたらしい光にじょじょに満たされていき、京都の街路は、目映

い光によって生みだされた時代の影が、ひとびとを背中から飲みこんでゆく。京都という街について、著者みずから感じ、考えぬいた思想が、さまざまな音に託されて、読み手の奥に管弦のように響く。えもいわれぬ、すばらしい読書経験だった。

高校生部門をこえ、一般部門の優秀賞でよいのでは、とも思った。ただやはり、本作には、最優秀の賞がふさわしい。第1回京都文学賞、中高生部門の優秀賞『十六畳の宝物』と合わせ、群を抜いてユニークな、この若き小説家の作品が、今後、さらに大勢の読者に読まれることを切に望みたい。

『母は桃が好きだった』。突然の母の失踪。探し求めるふたごの姉弟。残されていた日記の記述を手がかりに京都へやってくる。娘たちの切迫した心情が、息詰まる文体でいねいに描かれる。ページのむこうに、いきいきと脈打つ物語の芯を感じる。これはまちががなく、この著者によって書かれなければならなかった小説だとわかる。

姉弟ふたり、京都にやってきてすぐに小説が閉じてしまうのが残念だった。これでは京都に来ず、母の日記を読んでいるだけと、さほど変わらない。日記のなかの京都、日記のなかの母が、リアルな京都、リアルなユリに、ふたりの前で、ありありと移りかわってゆく様を描けていれば、より広がりのある作品になったのではないか。娘たちの思いは切々と伝わる。物語の起伏に富んだ、次回作に期待したい。

『忘れられた記憶』。書き出しが見事。流れる文体、自然な息づかい。語り手の記憶の浅瀬に、いつのまにか足を踏みいれている。

その自然な文体に導かれ、読者も気づけば京都駅前のバスターミナルにいる。そうして「私とそっくり」の人に驚き、そのあとについて歩きはじめる。淡いスリル。ミステリーめいた展開。このあたりの描写は、ほんとうにすばらしい。

「小さな神社」で語り手は、千年前の物語に触れる。源氏物語の人物らしい男女の会話は、物語の芯に触れず、その周縁をぐるぐるまわりつづけるだけで、読者にはもどかしい印象が残る。神社でのできごとと、「私とそっくり」の人との出会いは、なにかつながりがあるのだろうか。その判断は、読者に預けるべきでない。なぜなら、両方とも純粋に「謎」だから。目配せ程度でも、読み解くカギ、ヒントが必要だ。

この分量の短編に、純粋な、思いも寄らぬ「謎」は一個あれば十分だ。「私そっくり」の人をめぐる、京都の街を歩き、「私」という存在のふしぎさについて、「記憶」をカギに語っていく、そんなシンプルな作品にすれば、小説の強度、ユニークさ、ともに格段にあがったように思う。心地よいリズムの文体で、物語に引きこむ力は随一。奇をてらわず、なにげない描写をつづけるだけで、きっと読者は魅了される。自信をもって、さらに書きつづけてもらいたい。

《選評》 井上 荒野 (作家)

海外部門

『母は桃が好きだった』

日本語は稚拙であり、主人公が双子であることや母親が韓国人であるために苛められたことなどが、小説的に機能していない。「母は最初から母ではなかった」「母にも名前があるのだ」という考察の既視感。難は多いのだが、あらわしたいことを書くために奮闘していることは感じられた。「桃の芯が一番おいしくあってほしい」ではじまる冒頭部分の叙情性が好きだった。

『忘れられた記憶』

自分そっくりな人物に導かれ、いにしえの世界へ誘われる主人公。物語の気配に満ちているのだが、出来事だけが並べられ、主人公のプロフィールがほとんど外郭しか描かれなないので、小説として深まっていかない。絵馬を見て「この願いはどうなったのか、この願いを書いた人たちはどうなったのか」と想像するところなどよく書けていて、この感慨をふくらませて（源氏物語の引用などせずに）物語を作れたのではないかと思う。



©三原 久明

中高生部門

『彼のシナリオ』

祇園祭、京人形、箱屋の記述など、著者自身の日常に、そのようなものがあたりまえに存在するのであろうと思わされる読後感は悪くなく、この文学賞が要請するものでもあるのだろう。しかし主人公もストーリーもやや古臭く、あまりにも優等生すぎる気がした。「恩送り」のエピソードにかなりのボリュームが割かれているため、全体的に道德の教科書のような印象になってしまっている。作者は十代なのだからもっと自由に、疑り深く、世界と対峙するべきではないだろうか。

『二乗の翡翠』

辛い体験をして「日本語が嫌い」になった主人公が、フランス人男性との関係を通して、「日本語の美しさを知る」という思いつきは面白いけれど、言語がモチーフなのに言語についての認識が浅すぎる。この小説を書くために作者が考えなければならないことはたくさんあるはずだが、書きやすいところしか書かれていないため「ご都合主義」「きれいごと」の印象を受けてしまう。とくにノエと主人公の関係は恋愛なのかそうでないのか。伝わってこないというより作者がそれを伝えることを放棄しているように思えるのは大きな難点だった。

『闇に浮かぶ浄土』

文章は高校二年生とは思えないうまさ。自然や風景描写など、シンプルだがよく考えられた、よい表現がたくさんあった。文明開化を時代背景にして、変わっていかざるを得ない京都と、次第に目が見えなくなっていく少女とを描くというのも良い思いつきだったと

思う。人物造形は十分ではないにしろそれぞれの人間はそれなりに浮かんでくる（稔の存在理由がよくわからなかったのが残念）。時代小説として粗が多く稚拙であるという意見が出たが、小説を読んだという手応えは私には本部門の候補作中随一だった。

一般部門

『桜酔い』

たくさん登場人物をからませながら、物語を展開させ、読者を牽引していく力量はあると思う。しかし、学校で複数人からレイプされたという少年の過去、少年の父親の心中事件、ずっとヘテロのつもりでいた男が少年を愛するようになる経緯などを扱う手つきがあまりにも軽く、愛、性、人間そのものへの認識が浅いと感じた。

『教えて、シュレーディンガー』

物理や化学の世界、研究者の世界について興味深く読むことができた。しかし青春物語としては目新しいところはなく、あまり引き込まれなかった。すべてのエピソードを同じ比重で書かずに、もう少しメリハリをつけると良かったと思う。せっかくのシュレーディンガーが活かされていないのも残念だった。

『鬼と雨』

耽美的、隠微な雰囲気満ちており楽しめた。しかしその雰囲気も含めて、「わかっていることだけをきれいに書いた」という印象。妾=不幸、という決めつけが、逆に著者の価値観の古さを露呈させていたと思う。

『十七回目の出来事』

こんなことが起こったら世界的な大事件だろうと思える出来事の扱いが軽すぎて、物語に入りづらい。異世界のルールを説明することにページを割きすぎていて、登場人物たちの造形が浅く、「その世界に留まる人と戻って行く人」それぞれの理由に心を動かされなかった。

『天楽の鬼』

風景描写、音楽の描写、鬼の造形や鬼と源博雅とのとぼけたやりとりなど、よく書けているのだが、まとまりすぎていて何か面白くない。古典を下敷きにしており、同じ題材を使った先行作品も出ているので、どこまでオリジナルか、という問題もあると思う。

『備忘六』

あらわしたいことを書くために言葉を選んで書かれている。とくに京都の情景描写は、観光案内にならず、叙情的で美しい。京都に疎い私の中に、ありありと風景が浮かんできたのはこの小説が随一だった。怪獣による案内、妖怪たちの登場というアイデアも成功していると思う。

現実（昼）パートでは主人公が死ななければならない理由、幻想（夜）パートでは、生きなければならない理由が、書かれているというふうに読んだ。現実パートがつかずすぎるという意見が出たが、つかずすぎることを小説に書いて悪いとは私は思わない。そして現実パートがあるせいで、幻想パートの美しさがより際立つという効果があった。

ラストは様々な読みかたができるのだろうが、個人的には「生きなければならない理由」で終わってほしかった。

京都の街を盛り立てる。書籍化して話題を呼ぶ。本賞にはいくつかの目的があるだろう。その中で一番大切なのは、あたらしい才能を送り出すことだと私は思う。その一点で私はこの小説を最優秀賞に推した。

《選評》 校條 剛 (文芸評論家)

第三回目の応募作の本数は、これまでで一番少なかったが、そのことと反比例するように最終に残った作品の水準は高かった。

一般部門では『十七回目の出来事』、『備忘六』、『教えて、シュレーディンガー』のどれが受賞してもいいという腹づもりで選考会に臨んだ。なかでも、私の一押しは『備忘六』だった。十人の選考委員の事前投票では、私と同じ意見の方が多く、結果的に本作が最優秀賞と決まった。



『十七回目の出来事』(折小野和広)は、パラレルワールド設定作品で、ぐいぐいと引き込まれるようなストーリー展開だった。その意味では、今回一番の魅力作品だったが、「メンター」と「門」の意味の混乱が目につくし、語り手浩一の弟浩二がなぜそちらの世界にいて、さらに残ろうとすることなど、疑問点もまた大きかった。疑問点を最終的に回収してくれているかが、採点の要かなと考えていたが、やはり疑問は解決されず残ったままだった。これらの疑問点は作品の根幹につながっているため、小手先の直しでは済まないだろうと、残念ながら二重丸という訳にはいかなかった。それでも、同じシーンを繰り返す日々のなかで、毎朝出会う娘さんが、三回目くらいの出会いで「また会えましたね」といつもと違うセリフを述べる場面など、私の想像を裏切るような展開がこの作品の面白さをなしているのだと気がついた。毎日、同じ状態が繰り返すという設定の世界なので、娘さんはいつも同じセリフを繰り返すのが常道だったろう。こういう意外な展開がところどころに仕掛けられているので、設定の不自然さを飛び越えた面白さがストーリーを活気づけている。不自然なところをある程度辻褄を合わせれば充分公刊に値する作品になるかもしれない。不自然さを面白さが上回ればいいのだから。

『桜酔い』(奈波はるか)に関しては、人物の背景説明が足りないことで、心中の理由が分からないなど、不足部分が目立ちすぎていた。同性愛をごく自然な行ないとして、余分な言い訳がない点は面白かった。ボーイズ・ラブ小説の大人版を書こうとしたのだろうか。

『鬼と雨』(荷福文)に関しても、言うべきことはほとんどない。単に耽美的な、背徳的な世界に浸りたいのなら、その姿勢を明確に打ち出すべきだと思う。何が書きたいのかテーマが不在と感じた。文章の質が古くさく感じられるのもマイナスだと思う。

『教えて、シュレーディンガー』(新貝柚)はかなり面白かった。この文学賞では第一回にも「京大もの」と呼ぶべき作品、つまり百万遍の京大キャンパスを舞台とした学生小説があったが、これもその範疇に入る。いわゆるリケジョ(理科系女子)が主人公であるから、「科学」の世界を垣間見せてくれるが、文系といわれる読者にも理解できるように程よく外形をとらえて描写しており、そのあたりは非常にうまいと感じた。他の選考者の意見では、高名な物理学者シュレーディンガーの存在感が薄いと評されていたが、確かにこの高名な学者の存在感がもっと強ければよかったろう。シュレーディンガーが突然登場するときの出し方からして、大人し過ぎるだろう。この小説全体に山や谷をあまり感じさせ

ないのは、主人公の性格にもよるのだが、作者がドラマティックに書こうとする努力をしていないせいもある。さらに、問題だったのはコミックに類似設定のシリーズが存在し、しかも、その作品が人気作品でもあり、巻数を重ねているという指摘がなされたからである。そのコミックについては後日冒頭部分を読んでみたが、やはり似すぎている。細部のストーリーやテーマは違っているだろうと想像出来るが、「地方の神童が京大（モデルはこの大学）に入学して最初の授業で挫折する」という大枠が同じであるのは、やはり作品の独自性に傷がついてしまう。

『備忘六』（佐藤薫乃）。「鶴」の伝説を主人公の人生に重ねるといった技巧的な作風なのに、それとは裏腹に心に沁みる美しい作品だった。この作者は女性作家には珍しく諧謔とユーモアの資質が感じられる。少女時代の小日向が「ぬ」と「め」を混同するところなどで笑わせてくれたりとか、本来悲しみに充ちたストーリーのなかで、コメディリーフがしっかりと仕込まれている。現実の京都とファンタジーのなかの京都を交互に描きながら、ざらざらとして辛く、言葉と肉体の暴力にさらされる現実と、心優しい化け物ゲーデモスライダーに守られて歩く夜のファンタジー世界の対照が、当たり前の手法ながら手堅くまとまっている。ファンタジーの部分の北野天満宮の夜店のシーンが際だって印象に残る分、祇園の妖怪バーと喫茶店「ソワレ」のエピソードが付け足しのように感じるのは残念。「白いかえる」のイメージが未消化と思えるのも瑕瑾。しかし、主人公小日向の人生の悲しさが深く胸の奥に刺さり、読後、いつまでも感動が後を引いた。読ませてくれてありがとうと感謝したい。タイトルの意味は分かるのだが、やはり本になるとときには変えたほうがいいだろう。

『天楽の鬼』（彼方みさき）。音楽を小説で表現する行為は昔から試みられてきたが、実際に音楽が鳴らないのだから、しっかり言葉で表現して欲しいものだ。だが、やはりこの小説からは音楽が聞えてこなかった。古典に準拠した小説は芥川龍之介の作品がすぐに思い浮かぶが、やはり芥川の才能は特別だったと、つい比較してしまった。この作者独自の個性が足りなかったと思う。

中高生部門では、本賞の第一回のときに優秀賞をとった高野知宙さんの『闇に浮かぶ浄土』が大多数の委員の高評価を得た。しかし、私は小峰大和さんの『彼のシナリオ』のほうが、無理な背伸びをしない中高生らしい作品と感じたので、こちらを推した。一見稚拙に見える文章も誠実な語り振りが好ましく感じる。「恩送り」というテーマを教科書通りではあるが、丁寧に叙述しながら浮き上がらせていくのは立派だと感じた。

『闇に浮かぶ浄土』はこの種の「芸道モノ」を読み慣れている私には、目新しさが見つけられなかった。通俗的なエピソードのつながりに、その作者個人の「作家性」が寸分も感じられなかったのである。登場する全ての人物造形に不足が見られる。祇園のお菊と藤之助の父親との関係は、こんなきれいな事ではないはずで、そうでなければお菊に恩返しをすることなど考えられないだろう。藤之助とちとせの関係もままごとじみている、いかにも高校生の作品と言え言えるが、それならこのような大人の領域の題材を選ぶべきでは

なかったろう。文章技術の点でも問題を感じるのは、視点の移動が不自然な箇所が散見される点である。視点はある程度の節度をもって変えていかなければならない。いま一度、視点の勉強をしてほしいと思う。ただ、維新聞もない京都の雰囲気在必死に表わそうとしている姿勢には感心した。天皇を東京に奪われた京都人の焦りと矜持をテーマにしたということに、この作者の京都への愛情の深さが感じられた。最優秀作受賞に反対しなかったのは、それが理由である。作者に言いたいのは、大人の世界はゆっくり学ばいいので、背伸びせずにいま書ける題材に挑戦してほしいということである。

『二乗の翡翠』（長月藍莓）に関しては、意味不明の不自然な作品としかいいようがない。唯一褒めるとすれば、トントンと話しがつながっていくテンポ感だろうか。

海外部門は昨年と比べると今年は寂しい。『忘れられた記憶』（イザベラ・ディオニシオ）はドッペルゲンガーが過去の物語に案内してくれるというアイデアを生かし切れなかった。描写と説明を絞りすぎて、思わせぶりが災いしている。

『母は桃が好きだった』（ダヨン）。作品の意図が不明なので、読後どこに連れていかれたのかと途方に暮れてしまう。蒸発した母の日記のなかから、ぼんやりとでもいいので、答えを見出して欲しかった。拙くはあるが必死で書いたと思われる日本語の文章には、韓国的というか、独特の清冽な詩情が流れていて、心が洗われるようだった。従って、読後感はいい。

二作とも賞を差し上げるのにはあと一歩という判断で奨励作という結論になった。